ブィリーナにおける「鳥」――ポエチカ分析の試み より

水上　則子

1.はじめに－ブィリーナの「ポエチカ」

ブィリーナに対してこれまでに行われてきた多種多様なアプローチの中で、もっとも成果を上げているものの一つが「ポエチカ」研究であろう。

フォークロアに対するポエチカ研究は、A.H.ヴェセロフスキー、A.C.スカフティモフなどを経て、現代のΦ.M.セリヴァーノフ、B.M.ガツァークなどに受け継がれている。この間に、いささか漠然とした「形態論」から始まった研究の方法も進歩して、セリヴァーノフによる叙事詩の比喩の総覧の作成(1)や、ガツァークの、同じ歌い手が同一のブィリーナをある程度の時間をおいて繰り返しているという記録について、その異同を行単位で克明に比較することで、ブィリーナの伝承のプロセスを考察する、という研究(2)のような、具体的・分析的なものが主流となっている。

本稿では、ブィリーナのポエチカをさまざまな角度から観察するために、一つのテーマを設定する、という方法を試みた。このテーマとしたのが「鳥」である。その理由は、ブィリーナにおいては、鳥が重要な役割を果たしている場面・モチーフが少なくないこと、鳥の名を持った人物も多く登場し、人物像の中での鳥のイメージが重要であることが推測できること、比喩の形象としても鳥がしばしば用いられていることなどであり、

---

(1)Селиванов Ф.М. *Художественные сравнения русского песенного эпоса: систематический указатель.*

(2)Гацак В.М. "Эическое знание певца". *Устная эпическая традиция во времени. Историческое исследование поэтити.*

換言すれば、鳥という切り口を通してブィリーナの諸相が浮かび上がるものと考えられるからである。

2.場面とモチーフ・ディテールによる作品分析

この章では、以下の9種類のブィリーナを材として、場面・モチーフ・ディテールを単位として分析を行う。

「場面による分析」は、ブィリーナのヴァリアントの範囲を定めるために行うものである。ブィリーナの記録においては、同名であって内容が大きく異なっているもの、また逆に、タイトルは全く異なっていても内容に大きな共通性のあるものが珍しくない。このため、「同じ作品」か否かを論じるには、内容面からの、共通性の有無の検討が不可欠なのである。

この作業の一部は、A.M.アスターホヴァが「北方のブィリーナ」において行っているが(1)、結果のみがきわめて簡単な形で示されているだけで、検討の過程が示されていない。そのためでもあるが、結果として示されているヴァリアントの範囲にも若干の不適切さがあるように思われ、無批判で利用できるものとは言えない。

ブィリーナの内容を客観的に分析するためには、それぞれのブィリーナの筋を取り出して示すことが最良であろう。そして、筋を取り出すためには、筋を構成する要素である「モチーフ」を取り出さなければならない。しかし、この「モチーフの取り出し」という作業は、ヴァリアント間の差異が大きいとしばしば非常に困難なものとなる。

このため、ここでは、特に差異が大きいと認められるブィリーナについては、筋の分析に先立って、どのような場面で構成されているかを調べた。そして、場面の共通性に基づいてヴァリアントの範囲を定め、その範囲内でモチーフ分析を行う、という手順を取った。

「モチーフによる分析」は、場面分析で多くの作品の中に共通して存在すると認められた場面について、その筋の流れを構成している要素を取り出すというものである。こうして取り出されたモチーフを比較することで、ヴァリアント間の共通点・相違点が明らかになる。

---

(1)*Былины Севера*. Т.1: Записи, вступ. ст. и коммент. А.М.Астаховой; Т.2: Подгот. текста и коммент. А.М.Астаховой.

さらに、ブィリーナを構成する要素として重要なものに、「ディテール」、すなわち筋の流れを左右することはないが、いくつものブィリーナに共通して見られるので、何らかの存在意義を持っているに相違ない細部がある。筋の流れと関連を持たない要素は、伝承の過程で消失しがちなものに思われるが、ある細部がある特定の筋の多数のヴァリアントに広く残っているという状況があれば、そのディテールとその筋との結びつきは本質的なものである可能性が大きい。また、ある細部が様々な筋のブィリーナに見られるのであれば、その細部とその筋との関連を考えることはあまり意味がないことになる。

ここでは、分析の過程で、特に「鳥」と関連のあるディテールが見られた場合には随時とりあげて考察することとした。

なお、ブィリーナの採録・刊行は、19世紀初頭からソビエト期に至るまでの成果を合わせると膨大な量となるが、ここで対象としたのは以下の6種である。

Древние российские стихотворения собранные Киршею Даниловым. М., 1977（以下、「キルシャ・ダニーロフ集」と称し、К.Д.と略記）

Песни, собранные П.Н.Рыбниковым. В 3 т. М., 1909-1910.（「ルィブニコフ集」。Рыбн.と略記）

Онежские былины, записанные А.Ф.Гильфердингом летом 1871 года; В 3 т. М.;Л., 1949-1951.（「ギリフェルジング集」。Гильф.と略記）

Русские былины старой и новой записи. Под ред. Н.С.Тихонравова и В.Ф.Миллера. М.,1894.（「古今の記録によるブィリーナ」。Тих.-Милл.と略記）

Беломорские былины, записанные А.Марковым. М., 1901.（「白海のブィリーナ」。Марк.と略記）

Былины новой и недавней записи из разных местностей России. Под ред. В.Ф. Миллера. М., 1908.（「ロシア各地のブィリーナ」。Милл.と略記）

なお、以上の収集に含まれている作品でも、散文の形のものは対象外とした。

1)ヴォリガ／ヴォルフ／ヴォリガとミクーラ／ミクーラ

ヴォリガという人物は、単独でブィリーナの主人公となっている場合と、「ミクーラ」という人物と一緒に描かれている場合とがあり、筋の展開も大きく異なっている場合が

多い。また、わずかながら、主人公の名が異なるが、筋がこれに類似しているという例もある。a)ヴォリガが登場し、ミクーラが登場しないもの（Рыбн.38,Рыбн.146, Гильф.15, Гильф.91）、b):aと類似しているが、主人公の名が「ヴォルフ」であるもの（К.Д.6, Марк.51）、c)ヴォリガとミクーラの両者が描かれているもの（Рыбн.3, Рыбн.115, Гильф.2,Гильф.32,Гильф.45,Гильф.55,Гильф.73,Гильф.156,Гильф.195）、d):cと類似しているが、主人公の名がヴォリガ・ヴォルフでないもの（Гильф.255）、e)ミクーラが単独で登場し、ヴォリガ・ヴォルフは登場しないもの（Рыбн.69,Рыбн.78, Гильф.98, Гильф.113）について、場面による分析を行うと、これらのブィリーナは以下の３つに分けることができる。

Ⅰヴォルフないしヴォリガが単独で登場するもの（a,b）

Ⅱヴォリガとミクーラが登場するもの（c,d）

Ⅲミクーラが単独で登場するもの（e）

この分類は、Вс.Миллел, С.Шамбиинаго, R.Jakobsonらによる、「ヴォリガ／ヴォルフだけを主人公とするブィリーナの中のヴォリガと、ミクーラと共に登場するヴォリガとは本来別の人物であり、混同されて共通部分を持つようになった」という考察(1)によっても裏付けられ、この３つは別々のブィリーナであると結論することができる。

これらのブィリーナのそれぞれについて、モチーフを分析し、その筋を取り出すと、以下のようになる。

Ⅰ（「ヴォリガ」）：主人公の誕生には天変地異などの前兆があり、誕生の結果として三界の生物が逃げ出す。賢く成長し、従士を集める。従士と共に狩りをし、術を使う。鳥に変身して敵王のもとで情報を集め、術と従士の力で敵王を打ち負かす。

Ⅱ（「ヴォリガとミクーラ」）：主人公は従士団を持っている。三界の生物は彼から逃げる。伯父ヴラヂーミル公から与えられた町に赴く途中、ミクーラに出会う。ミクーラの超人性をその鋤・馬などから知る。町で町人と戦い、勝利する。

Ⅲ（「ミクーラ」）：ミクーラの描写。

これらの筋を構成するモチーフのうち、鳥と関わりのあるものは、

○鳥に変身し、敵王を偵察する

---

(1)R.Jakobson "The Vseslav Epos". p.306

である。また、ディテールとして、

○獣・鳥・魚が逃げる

○獣・鳥・魚に変身する術を学ぶ

○獣・鳥・魚を狩る

○狩りに際して獣・鳥・魚に変身する

○主人公と敵王との戦いを鳥にたとえる

○ミクーラの身なりの描写に、鳥の比喩を用いる

などがある。

「ヴォリガ」のブィリーナにおいては、モチーフとしての変身は、「主人公が鳥に変身する」という形で単独で用いられ、獣や魚には言及されない場合が多い。

一方、「獣・鳥・魚」という三界の生き物が「主人公から逃亡する」というディテールには、主人公が「獣・鳥・魚」に変身し、それらを狩るというディテールが呼応している。この２種の変身は、一見したところでは似ているが、別々に扱う必要があるものと思われる。

また、「主人公（とその敵手）の戦いを鳥の争いにたとえる」というディテールは、「変身」のディテールの変形であろう。そして、「獣・鳥・魚に変身する術を学ぶ」というディテールは、この両者の中間に位置するものと言える。

ミクーラに用いられる鳥の比喩とは、上でe)と分類した作品のみに見られるもので、ミクーラの姿を「かかとの下を雀が飛び、爪先には卵を転がせる（Рыбн.78,1.8-9）」と描写しているものである。これは、特に「チュリーロ」に対して頻繁に用いられる、洒落者の表現の一典型であり、「ミクーラ」の中へは紛れ込んだものと考えられる。

2)ドブルィニャとマリンカ

ドブルィニャ・ニキーチチとマリンカあるいはマリーナという名の女性の葛藤の物語は、それだけで一編のブィリーナをなしている場合と、ドブルィニャの活躍を描くいくつかの物語の一部分として語られている場合とがある。

К.Д.9, Рыбн.143, Рыбн.188, Рыбн.192, Гильф.5, Гильф.17, Гильф.78, Гильф.122, Гильф.163,Гильф.227, Гильф.241, Гильф.267, Гильф.288, Гильф.316, Тих.-Милл.23, Тих.-Милл.24, Тих.-Милл.25, Тих.-Милл.26, Тих.-Милл.27, Милл.22, Милл.23, Милл.24, Милл.25, Милл.пр.6の24編を、場面によって分析すると、前者の場合がほとんどで、

後者の例は圧倒的に少ない。従って、この物語は独立したブィリーナとして扱い、他のエピソードと一緒に語られている作品からは、当該の場面だけを取り出して、モチーフ分析を行った。その結果得られた筋は以下のようになる。

ドブルィニャ・ニキーチチは、「マリンカに近づいてはいけない」と戒められるが、マリンカの家のそばに行ってしまう。マリンカの家には鳩がいて、ドブルィニャはその鳩を射ようとするが、矢は鳩には当たらず、マリンカの家または情人に被害を与える。マリンカはドブルィニャを呪術によって操り、動物または鳥に変身させる。ドブルィニャの親族の女性が、マリンカと対決し、元に戻させる。ドブルィニャはマリンカを殺す。

この筋を構成するモチーフの中で、鳥が登場するのは、

○マリンカの家に鳩がいる／マリンカが鳩を放つ

○ドブルィニャが鳩を射ようとする

○マリンカがドブルィニャを鳥（など）に変身させる

○マリンカが鳥に変身する

である。このうち特に目に付くのは「鳩」のモチーフで、24編のうち19編に何らかの形で鳩が登場している。この「鳩」を射ようとした矢が逸れ、その矢を巡って２人が争う、というモチーフが筋の中心部分となっているためである。このモチーフにおいて、ドブルィニャが鳩を射る理由には、「鳩＝恋人」というパラレリズムが根底にあると言える。

また、マリンカによるドブルィニャの変身は、「変身させてやる」という脅しだけのものも含めれば全体の2／3に見られるモチーフだが、変身させるものが「鳥」である例はごくわずかで、大部分は牛などの動物である。その一方で、マリンカ自らが変身する場合は安定して「カササギ」である。

3)イヴァン・ゴヂノヴィチ

イヴァン・ゴヂノヴィチの求婚とその失敗の物語には、今回対象としたブィリーナ集の中だけでも、22編のヴァリアントがある（К.Д.16,Рыбн.10,Рыбн.122,Рыбн.145,Рыбн.195,Гильф.51,Гильф.83,Гильф.179,Гильф.188,Гильф.256,Гильф.275,Гильф.293, Марк.14, Марк.78,Тих.-Милл.42,Тих.-Милл.43,Тих.-Милл.44, Милл.73, Милл.75, Милл.76, Милл.77,Милл.пр.12）。その上、主人公の名は異なるが、場面によって分析すると、同じブィリーナであると認められる作品も3編見出された（Рыбн.93, Гильф.194,Милл.74）。

計25編のモチーフ分析から、筋は以下のような形と考えられる。

イヴァンは求婚に赴くことになる。軍勢／財を持参することを断り、仲間と共に出かける。父親に求婚するが、一旦は拒絶される。イヴァンは実力行使によって花嫁を獲得する。帰国の途中、同行者と別れたところで、競争者と遭遇する。イヴァンと競争者は戦い、イヴァンは優勢となるが、花嫁の裏切りによって苦境に陥る。そこへ鳥が飛来し、競争者は鳥を射ようとして矢が逸れ、死ぬ。イヴァンは花嫁を切り殺す。

この筋を構成するモチーフの中で、鳥が登場するのは、

○イヴァンが苦境に陥ったところへ鳥が飛来する

○競争者が鳥を射ようとして死ぬ

である。この鳥の種類は、鳩が多いが、白鳥／カラスというものもあり、明言されていないヴァリアントもある。「イヴァン・ゴヂノヴィチ」における鳩の射撃には、「ドブルィニャとマリンカ」における同じモチーフと似通ったところがあるが、「矢を射た本人に矢が当たる」という部分は不可解である。

また、ディテールとして、

○理想の花嫁のたとえに鳥を用いる

をもつものがある。これは、「顔は雪のように白く、頬は芥子の花のよう、振る舞いは孔雀のよう、言葉は白鳥のよう（Рыбн.195,1.41-44）」という形で、いくつかの比喩を同時に用いて「理想の花嫁」を表現するものである。他の求婚譚にも見られ、このブィリーナのみに特徴的なものではない。

この表現においては、比喩の形象として用いられるものの種類は必ずしも一定していないが、「イヴァン・ゴヂノヴィチ」においてもっとも頻繁に用いられるのは「白鳥のような話し方」である。「白鳥」は、セリヴァーノフの「比喩索引」からも、ブィリーナにおける直喩の用法としては、色や形よりも声・音のたとえに用いられることが多いという結論が得られるが、この例によっても確認できることになる。

4)イリヤ・ムーロメツと盗賊ソロヴェイ

イリヤ・ムーロメツを主人公とするブィリーナは、数・種類ともにきわめて多いだけでなく、題名と内容との関係もかなり混乱した状態にある。

その中で、「盗賊ソロヴェイ」の登場するブィリーナは小さからぬ割合を占めている

が、「盗賊ソロヴェイ」の名がタイトルに反映されているものは必ずしも多くなく、ここで対象としているブィリーナ集の中では20編であった（Рыбн.4, Рыбн.61, Рыбн.82, Рыбн.116,Рыбн.127,Рыбн.139,Рыбн.170,Рыбн.191,Гильф.3,Гильф.56,Гильф.74,Гильф.104,Гильф.112,Гильф.171,Гильф.212,Гильф.274,Тих.-Милл.II.5,Милл.1,Милл.2,Милл.3）。また、ソロヴェイが登場していても、タイトルに反映されていないブィリーナは、10編見出された（К.Д.49, Рыбн.103,Рыбн.110,Гильф.120,Гильф.210,Тих.-Милл.II.1, Тих.-Милл.II.7,Марк.1,Марк.68,Марк.107）。

この30編のブィリーナを、場面によって分析すると、かなりのばらつきが見られた。ヴァリアントの範囲という観点から特に問題となるのは「道しるべに『死の道・結婚の道・富の道』等の３つの道が記されていて、イリヤがその道を辿って悪人を平らげる」というエピソードである。このエピソードは、「イリヤと３つの旅」という別個のブィリーナの核となる場合が多いが、ここで取り上げた作品のうち３編は、アスターホヴァによる分類の中では、「イリヤとソロヴェイ」のヴァリアントであると同時に、「イリヤと３つの旅」のヴァリアントにも含められている、いわば両者の中間に位置する作品であるということになる。

このように、イリヤを主人公とする作品においては、場面構成だけからヴァリアントの範囲を定めることが不可能な場合がある。従って、ここでは、「ソロヴェイ」という人物が登場する作品はすべてヴァリアントとして扱う。

これらのヴァリアントから取り出した大まかな筋は以下のようなものである。

> イリヤは回り道をせずにキエフへ行こうとしている。途中、異教徒の軍勢に包囲されている街を救う。キエフへの途上で名高い「盗賊ソロヴェイ」と出会う。イリヤには、ソロヴェイの攻撃は効果がなく、ソロヴェイは射落とされる。ソロヴェイの家族はソロヴェイを取り戻そうとするが果たせない。イリヤはキエフに到着し、ヴラヂーミル公に目通りする。公はソロヴェイの鳴き声を聞きたがり、イリヤが鳴かせると人や建物に被害が及ぶ。イリヤはソロヴェイを殺す。

この筋を構成するモチーフの中で、鳥と関わりのあるのは以下のものである。

○盗賊が「ソロヴェイ」の名を持っている

○盗賊が「ソロヴェイ鳴き」をする

○ヴラヂーミル公が、「ソロヴェイ鳴き」を所望する

この人物は、鳥の名を名前として持ち、「翼」「巣」といった語で手や家を表現され

ていることもあり、鳥性を持った人物ということができよう。しかしながら、半人半鳥という表現はふさわしくない。なぜならば、ソロヴェイの家族が、イリヤがソロヴェイを生け捕りにして馬で行く姿を見て、ソロヴェイがイリヤを捕らえていると見間違えるというモチーフがしばしば現れているからである。このモチーフは、ソロヴェイの外見がイリヤのそれと大きく違っていないことを意味している。

盗賊の武器である「ソロヴェイ鳴き」の実体は謎だが、このディテール自体は他のブィリーナにも見られる。「イリヤと子との戦い」のいくつかのヴァリアントでは、イリヤ自身がこれを敵を攻撃するために使っている。また、「デューク」という人物を中心としているブィリーナの中にも、デュークのボタンがこの「鳴き声」をあげ、聞いた人々が卒倒するという情景が見られる。しかし、本来はこの「ソロヴェイ」の属性であって、ここからいくつかのブィリーナへ流入したものと見てよいであろう。

また、ディテールの中には、包囲された街（イリヤに救われる）の描写として、

○鳥でさえ飛び越えることができない

というものが見られる。この表現も、他のいくつかのブィリーナにも見られるもので、一つの典型的表現と言える。

5)イリヤと子との戦い

「イリヤと子（との戦い）」と呼ばれるブィリーナ（Рыбн.5, Рыбн.117, Гильф.46, Гильф.77,Гильф.219,Гильф.226,Гильф.233,Гильф.246,Марк.4,Марк.70）と、「イリヤとソコリニク」というタイトルのブィリーナ（Рыбн.80,Рыбн.177,Гильф.114）とは、しばしば多くの共通点を持っている。また、このいずれのタイトルでもないが、よく似た場面を持っているブィリーナもある（К.Д.50,Рыбн.160,Гильф.65,Гильф.265,Тих.-Милл. II.14,Тих.-Милл.II.31,Марк.94,Марк.98）。これらを同一のブィリーナのヴァリアントとみなすのが正しいのか、それとも別のブィリーナとして分けるのが正しいのかを明らかにするため、場面によって分析したところ、「戦い」をはさんでその前後の場面は大きく異なっている。一方、戦いの場面をモチーフによって分析すると、ほぼ以下のような筋になっている。

イリヤは侵入してきた敵と戦うが、相手を殺しそうになったところで、相手が息子と知って戦いをやめ、２人は別れる。子は戻ってきて再び挑み、殺される。

この「戦い」を持つ作品はすべてヴァリアントの範囲に含めることとすると、イリヤ

と戦う相手が息子でないものも多数含まれることになるが、この物語において、イリヤと「敵」とが親子である、という要素はきわめて重要であると考えられるので、タイトルは「イリヤと息子との戦い」とするのが妥当であろう。また、この「戦い」以外の要素（ドブルィニャをめぐる物語など）を多く持っているものに関しては、その一部分、すなわち「戦い」の部分だけを、ヴァリアントに含めることとする。

このブィリーナに登場している鳥は、いずれも上にあげた戦いの場面とは関わりを持っていない。従って、鳥の「モチーフ」とすることはできない。

ディテールとしては、次のような鳥の姿が目立つ。

○敵は鳥に由来する名（Сокольник）を持つ

○敵は鳥（Сокол）を連れて登場し、戦いに先立って放つ

この２点は、他のブィリーナには見られない、「イリヤと息子」に固有のディテールであり、かつては筋の上でも何らかの役割を持っていたのではないかと思われる。一方、

○カラスが飛来し、敵の来襲を告げる

というディテールは、「クリャコフの王子たち」「リトアニア人の来襲」などにもみられる。また、

○イリヤまたは敵が「ソロヴェイ鳴き」をする

は、上述のように「イリヤとソロヴェイ」から借用されたディテールであろう。

6)クリャコフの王子たち

ここで取り上げる8編（Рыбн.21,Гильф.87,Гильф.136,Гильф.147, Гильф.182, Гильф.200,Гильф.302,Милл.70,Милл.71）には、場面の差異はない。モチーフによって分析すると、筋は以下のようになる。

> クリャコフの王子が家を出、カラスに会う。射ようとすると、「射るな」と言い、敵の来襲／居場所を教える。王子はその言葉に従って「敵」に出会い、戦う。王子は相手を殺しそうになるが、問うと兄弟と分かる。戦いをやめて共に帰郷する。

このように、戦いのパターンは上述の「イリヤと子との戦い」に類似しているが、結末は正反対である。

このブィリーナにおいては、以下のような鳥のモチーフが筋の中で重要な役割を果たしている。

○王子が鳥を狩りに出かける

○カラスを射ようとし、カラスに止められる

○カラスが敵の来襲・居場所を教える

王子の「狩り」は、「鴨・白鳥・雁を狩りに行く」という形で、他のブィリーナにも見られるものであるが、ここでは王子が野へ行くきっかけとなっている。そして、出かけた先で烏に出会い、言葉をかけ、矢を向けるのだが、その際に王子が口にする呪いの言葉には、「烏＝不吉なもの」というイメージが濃い。一方、矢を向けられた烏は口を利いて制し、敵の居場所を教えて王子をそちらへ向かわせる。その際には、烏の台詞から、「烏＝知恵あるもの」というイメージが生まれている。

7)ミハイロ・ポティク

このタイトルを持つブィリーナでは、ヴァリアントによる場面の相違が非常に大きいが、場面に基づいた分析によって以下の３種に分類することができる。

Ⅰミハイロの求婚譚、妻の死と蘇生の物語（К.Д.23, Рыбн.11, Гильф.82, Марк.8, Марк.74, Марк.100）

Ⅱミハイロは奪われた／裏切った妻を取り戻そうとするが、最後には殺す、という物語（Рыбн.28, Рыбн.28b, Рыбн.218, Гильф.150, Гильф.158）

Ⅲ　Ⅰ、Ⅱの両方の物語を持つもの（Рыбн.12, Рыбн.113, Рыбн.166, Рыбн.196, Гильф.6, Гильф.39, Гильф.40, Гильф.52）

そして、このいずれもが多数の実例を持っているので、Ⅰに属するブィリーナからⅡに相当する部分が脱落したという見方にも、また逆に、Ⅱに属するブィリーナからⅠに相当する部分が脱落したと考えることにも無理がある。したがって、ⅠとⅡとは別個のブィリーナとして存在していたが、ある時点で結びつけられてⅢのタイプの作品ができた、と考えられる。

それぞれの筋の形は以下の通りである。

Ⅰ主人公ミハイロは白鳥に会い、矢を向けると「射るな」と言われる。白鳥はミハイロの花嫁となる。結婚に際し、「一方が先に死んだら、残った方も共に墓に入る」という誓いを立てる。妻が死に、ミハイロは約束通り墓に入り、妻を蘇生させる。

Ⅱミハイロの不在中に、妻は他の人物に嫁ぐ。ミハイロは後を追う。妻はミハイロに酒を飲ませて眠らせ、石に変えるが、ミハイロの義兄弟が探しに来て元に戻す。

ミハイロは再度追い、妻は再度酒で眠らせ、殺そうとする。ミハイロは助力者を得て救われ、妻を殺す。

ここで筋と関わりを持っている鳥には以下のようなものがある。

○ヴラヂーミル公が勇士に鳥の狩りを命じる

○ミハイロが鳥を狩りに出かける

○ミハイロが白鳥を射ようとし、白鳥に止められる

○白鳥が娘に変身し、花嫁となる

ミハイロが白鳥に出会う場面を持つブィリーナでも、そのきっかけには何種類かがあるが、「鳥の狩り」を命じられ、出かけた先で出会う、というものもある。また、自ら赴いていることもある。白鳥を見た主人公は、矢を向けるが、白鳥に制される。このモチーフは前述の「クリャコフの王子たち」における鳥の射撃と同じパターンである。口を利いた白鳥は変身し、ミハイロの花嫁となる。以上のモチーフはⅠに属するブィリーナにおいて非常に重要なものである。

Ⅰに属するブィリーナの中でも、「白鳥の変身」というモチーフを持たないものもあるが、その場合には以下のようなモチーフで筋が進行している。

○ヴラヂーミル公が「白鳥のマリヤ」を連れてくるよう命じる

○ミハイロが「白鳥のマリヤ」を得るために出かける

○「白鳥」と言う名の娘がミハイロの花嫁となる

なお、ミハイロの花嫁の名は、「マリヤ」のほかに、「アヴドーチヤ」「ナスターシャ」等の例もあるが、その大多数が「白鳥の」という語を伴っている点で一致している。「白鳥が変身して花嫁となる」というモチーフのないブィリーナにおいても、名前に「白鳥の」という形容語が加わることで、人物像に鳥のイメージを重ねる役割を果たしている。

○鳥が飛来して妻の死を知らせる

これは「ミハイロ・ポティク」以外にも見られ、筋を問わずに用いられるモチーフと言ってよい。また、ヴァリアントによっては人間の使者が訪れており、どちらが優勢ともいいがたい。

8)リトアニア人の来襲

ここで取り上げる10編（Рыбн.45,Рыбн.114,Рыбн.135,Рыбн.152.Рыбн.164, Гильф.12,

Гильф.42,Гильф.61,Гильф.71,Тих.-Милл.69）は、「クリャコフの王子たち」と同様、場面の差異の少ないブィリーナである。筋は次のようなものである。

リトヴァ王の２人の甥が、王の反対に逆らってルーシを攻め、ルーシの公の姪／妹とその子を捕虜にする。知らせを聞いて、公は、兵を選び、指示を与えて、自身は変身して敵の武器を損なう。姪／妹の子が見破り、公は逃げる。鳥に変身して兵に合図を送り、リトヴァ王子たちをうち負かす。王子の一人は目をくり抜かれ、その背に足を折ったもう一人を乗せて帰国させられる。

ここでは、

○主人公が鳥に変身して自軍に合図を送る

というモチーフが筋の中心となっており、このモチーフはすべてのヴァリアントに見られる。一方で、

○鳥が飛来して、主人公に敵の来襲を知らせる

というモチーフも、ほとんどのヴァリアントに見られるが、その鳥の種類は一定していない。これは、「ミハイロ・ポティク」における、「妻の死の知らせが鳥によってもたらされる」というモチーフとも同種のものと思われるが、このブィリーナにおいてはほとんどが「鳥」である点は異なる。

○主人公は鳥（など）に変身して相手の装備を害する

の場合も、モチーフ自体はすべてのヴァリアントに見られるが、何に変身するかや、その変身の順序は一定していない。このモチーフは上述の「ヴォリガ」に見られるものと非常に類似していることも重要な点で、その類似の程度の甚だしさや、ヴァリアント間での細部の不一致は、これが「ヴォリガ」からの借用であることを物語っていると思われる。

また、「リトアニア人の来襲」に見られる鳥のディテールには、他のブィリーナに見られない次のようなものもある。

○主人公は鳥の比喩で自分の老いを嘆く／自分の若かった頃を回想する

しかし、これらのディテールは、ブィリーナというよりも叙情詩のジャンルに属するもので、そこからの借用であると見られている(1)。したがって、この「リトアニア人の来襲」というブィリーナは、そのかなりの部分が他からの借用でなりたっていると結

---

(1)Пропп В.Я. *Русский героический эпос*. с.520

論できる。

9)スフマン

スフマン、スフマンチイ、スハン等の人物を描いているブィリーナの記録の数は非常に少なく、対象としたブィリーナ集に含まれているのは計5編にすぎない（Рыбн.148, Гильф.63,Марк.11,Тих.-Милл.54,Милл.54）。しかも、場面によって分析すると、そのうちの1編（Милл.54）はヴァリアントと認めがたいものであった。残りの4編をモチーフによって分析すると、共通点・類似点としては、①主人公の名②主人公は、タタールの襲来で川が濁っているのを発見する③タタール軍を相手に孤軍奮闘し、重傷を負う④傷を負った状態でヴラヂーミル公に会うが、公からは十分に報いられないまま死ぬ、をあげることができる。この物語の輪郭は上のようなものであったと考えられる。

上記4編のモチーフ分析からは、このうちの3編（Рыбн.148,Гильф.63,Марк.11）が非常によく似ていることが明らかになったが、この場合にはむしろ度を越えて類似しているということが問題といえよう。Рыбн.148とГильф.63とを比較すると、主人公の死をめぐって、前者においては、「傷口に草を詰める」というモチーフと、「自ら草を引き抜き、死ぬ」というモチーフとがあって、それぞれ原因と結果とみなすことができるが、後者においては「原因」のモチーフがなく、「草を引き抜いた」のみがある、という矛盾がある。この矛盾は、後者の語り手が、前者の強い影響のもとにあったこと、言い換えれば、Рыбн.148から直接学んだということを物語っている。さらに、Марк.11も、Рыбн.148と非常に類似していると言えるが、この語り手であるアグラフェーナ・クリュコーヴァは、それまでに刊行されたブィリーナ集を読んでそのレパートリーを作り上げたという人物で、このブィリーナも、ルィブニコフ集から学んだに相違ない。従って、結論としては、Гильф.63、Марк.11をРыбн.148と同等に扱うことは不適切であり、ここで扱うべきヴァリアントはРыбн.148とТих.-Милл.54の2編のみだということになる。

Марк.11には鳥のモチーフ・ディテールは見られないが、Рыбн.148においては、

○主人公はヴラヂーミル公に白鳥の捕獲を約す

○主人公は白鳥に出会わない

というモチーフが重要な役割を果たしている。主人公はこの約束を果たせなかったことで公に責められ、自殺の道を選ぶことになる。この二つのモチーフは、「鳥を狩りにゆくが獲物がない」という、他のブィリーナにも頻出するモチーフの変形とも考えられる。

文献

Arant P. Compositional Techniques of the Russian Oral Epic, the Bylina. Garland Publishing 1990

Астафьева Л.А. Указатель мотивов, сюжетных ситуаций и повествовательных звеньев богатырских былин. (Фольклор. Проблемы историзма. М. Наука, 1988.所収)

Беломорские былины, записанные А.Марковым. М., 1901.

Былины новой и недавней записи из разных местностей России. Под ред. В.Ф.Миллера. М., 1908.

Былины Севера. Т.1: Записи, вступ. ст. и коммент. А.М.Астаховой
Т.2: Подгот. текста и коммент. А.М.Астаховой. М.;Л.,1938-1951.

Гацак В.М. Устная эпическая традиция во времени. Историческое исследование поэтити. М. Наука, 1989

Древние российские стихотворения собранные Киршею Даниловым. М., 1977

Лазутин С.Г. Поэтика русского фольклора. Рус.яз. и лит-ра. 2-е изд, испр. и доп. М. Высш.шк. 1989.

Онежские былины, записанные А.Ф.Гильфердингом летом 1871 года: В 3 т. М.;Л., 1949-1951.

Песни, собранные П.Н.Рыбниковым. В 3 т. М., 1909-1910.

Пропп В.Я. Русский героический эпос. изд.2-е. М. Худ.лит., 1958.

Русские былины старой и новой записи. Под ред. Н.С.Тихонравова и В.Ф.Миллера. М.,1894.

Селиванов Ф.М. Художественные сравнения русского песенного эпоса: систематический указатель. М. Наука, 1990

Скафтымов А.П. Поэтика и генезис былин. очерки. Москва-Саратов, 1924.

Jakobson R. The Vseslav Epos. "Slavic Epic Studies (Roman Jakobson Selected Writings Ⅳ. Mouton & Co. 1966.所収)

中村喜和 「ロシア英雄叙事詩 ブィリーナ」 平凡社 1992.